



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1960年代の女子大学大学院文系研究科新設における専任教員予定者について
Author(s)	山本, 美穂子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 15, 108-125
Issue Date	2020-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78188
Type	departmental bulletin paper
File Information	4.pdf



< 研究ノート >

1960年代の女子大学大学院文系研究科新設における 専任教員予定者について

山本 美穂子

はじめに

現代日本における大学（新制大学）は、敗戦後の教育制度改革により、誕生した。文部省は、1948年に前倒しで12校（公立大学1、私立大学11）の大学設置を認可した後、1949年度に国立大学70校を含む168校を設置、1953年度までに計226校（国立大学72、公立大学34、私立大学120）の新制大学を整備した¹⁾。それにあわせて、新制大学院は「大学院基準」（1949年4月大学基準協会決定、1955年6月改訂）をもとに整備され、私立大学では1950年度以降、国立・公立大学では1953年度以降に新制大学院が設置された。旧制大学（帝国大学、官立・公立・私立大学）、旧制高等学校、旧制専門学校等といった戦前の高等教育の基幹であった諸学校が戦後改革によって新制大学・新制大学院へと再編成されたことは、近現代日本における高等教育史上、重大な画期をなすものであった。

新制の私立女子大学において、大学院を設置し、文系研究科（修士課程）の新設が文部省から認められたのは、1952年3月の聖心女子大学大学院文学研究科が最初である。その後、文部省は、津田塾大学（1963年）、神戸女学院大学（1965年）、日本女子大学・実践女子大学・京都女子大学・共立女子大学（1966年）、同志社女子大学・金城学院大学（1967年）に対して、文系研究科（修士課程）の新設を認可した。1952年の聖心女子大学の大学院設置が異例のはやさであったこと、新制女子大学の大学院文系研究科の新設は1960年代に大きな動きがあったことがわかる。1970年代前半には、1960年代に計画していた大学院設置申請が財政問題や「大学紛争」等を理由に遅れた東京女子大学²⁾が1971年3月に認可された後、武庫川女子大学（1971年4月）、大妻女子大学（1972年）、昭和女子大学（1974年）にも大学院文学研究科の新設が認められた。

新制の国立大学においては、1950年代、旧制大学を前身とする大学のみに大学院の設置が限られていた³⁾。1963年、文部省が中央教育審議会の答申に基づき、「従来の研究者養成の目的のほかに、社会的要請の高まりつつある高度の専門的な職業人の育成という目的を達成するため、旧制大学系統のなかでなくても、教員組織・施設・設備などがとくに充実している新制大学の学部の基礎のうえにも設置することを認める」⁴⁾という新たな方針に転向するまで、女子高等師範学校を前身とする国立女子大学2校（お茶の水女子大学・奈良女子大学）は大学院の設置が認可されず、私立女子大学よりも大学院の設置が遅れた。

1960年代後半にはいり、お茶の水女子大学が1966年に大学院人文科学研究科（修士課程、7専攻）を、奈良女子大学が1968年に大学院文学研究科（修士課程、4専攻）の設置を認可された。

本稿では、新制女子大学大学院の文系研究科（修士課程）の「設置認可申請書」・「設置計画書」（判定原本、国立公文書館所蔵）に着目し、表1に掲げた新制女子大学12校（私立女子大学10校、国立女子大学2校）を対象として、大学院の専任教員予定者における女性の配置・経歴（大学、大学院、留学等）・学位・研究分野等をまとめ、大学・専攻分野毎でどのような差異・特徴が見られるのかを考察することとする⁵⁾。従来、新制女子大学の各沿革史では、大学院設置に係る「設置認可申請書」・「設置計画書」の内容やその教員構成について、具体的な記述はほぼ見られない。本稿は、前々稿及び前稿⁶⁾に引き続き、戦前戦後期の女性のキャリアパスにおける大学院進学的位置付けを考察する一環である。

表1 新制女子大学大学院の文系研究科（修士課程）の設置認可状況（1951～1970年度）

大学名	申請年	認可年	研究科名（専攻数）	専攻名
聖心女子大学	1951年10月	1952年3月	文学研究科(3)	英文学、国文学、史学
津田塾大学	1962年11月	1963年3月	文学研究科(1)	英文学
神戸女学院大学	1964年11月	1965年3月	文学研究科(2)	英文学、社会学
日本女子大学	1965年11月	1966年3月	文学研究科(2)	英文学、日本文学
実践女子大学	1965年11月	1966年3月	文学研究科(2)	英文学、国文学
京都女子大学	1965年11月	1966年3月	文学研究科(2)	国文学、東洋史学
共立女子大学	1965年11月	1966年3月	文芸学研究科(2)	演劇学、英文学
同志社女子大学	1966年11月	1967年3月	文学研究科(1)	英文学
金城学院大学	1966年11月	1967年3月 1968年3月	文学研究科(1) 文学研究科(1)	英文学 国文学
お茶の水女子大学	1966年1月	1966年4月	人文科学研究科(7)	哲学、史学、地理学、日本文学、中国文学、英文学、教育学
奈良女子大学	1968年1月 1969年1月	1968年3月 1969年4月	文学研究科(4) 文学研究科(1)	国文学、英文学、地理学、教育学 史学
東京女子大学	1970年11月	1971年3月	文学研究科(2)	日本文学、英米文学

1. 聖心女子大学大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

聖心女子学院高等専門学校（1916年設置、英語科・国語科・歴史科）を前身とする聖心女子大学（私立）は、1948年3月25日、新制大学として設置が認められ、1948年度に文学部（外国語外国文学科、国語国文学科、歴史社会学科、哲学科）を開設した。1948年2月28日付「大学設置認可申請書」⁷⁾に拠れば、大学の「維持経営の方法」には、授業料等の

収入や寄附金のほか、カトリック修道会聖心会を母体とする財団が負担し、「本財団は戦後は主として、米国聖心会の援助を受け、大学設立の臨時的経費は勿論将来に亘る経常的援助も約束されている」と記述があり、大学設立と将来的な財務基盤には、米国聖心会の後ろ盾があると強調している。大学の教員予定者の構成も、米・英・仏国等からの外国人女性が多く見られる。「将来計画」には、「現在、本学には大学院の設けがないからポスト・グラデュエート・コースは其の他の外国の姉妹校で修める」こととなり、また、「外国学生を迎えることも、考えねばならないから、其のためには、現在の文科系に理科系をも併置し、更に大学院の開設も急がねばならない」と記述があり、1948年時点で既に大学院設置も考慮に入れていることがうかがわれる。

上記の「将来計画」のとおり、聖心女子大学は、文学部第1期生を送り出す4年後の1952年3月には、3専攻（英文学・国文学・史学）を有する、大学院文学研究科（修士課程）の設置について文部省から認可を受けた。聖心女子大学と同じく1948年に設置認可された他の新制の私立女子大学4校（日本女子大学、津田塾大学、神戸女学院大学、東京女子大学）や、1949年に設置された国立女子大学2校（お茶の水大学、奈良女子大学）は1952年時点で大学院新設には至っておらず、聖心女子大学は新制女子大学の中で唯一の大学院設置が実ったこととなる。

表2 聖心女子大学大学院文学研究科の専任教員予定の女性一覧（1951年10月）

氏名(出身国)	専攻	職名	担当演習等	学位	出身校	著述、論文数
ブリジット・テンブル・キオ(米)	英文学	教授	ルネサンス時代英文学	M.A.	ワシントン・カトリック大学	著述1、論文6
ジーン・ヌツン(米)	英文学	教授	英文学研究法、中世英文学	M.A.	スタンフォード大学	著述1、論文4
フローレンス・アッキンソン(米)	英文学	教授	18世紀英文学、西洋文学史	M.A.	ボストン・カトリック大学	著述4、論文11
メリー・コーラ・マッカーディ・フrint(英)	英文学	教授	19世紀英文学、キリスト教文学	B.A.	ダブリン・ユニヴァーシティ・カレッジ	論文3
エリザベス・ブリット(米)	英文学	教授	現代英文学(哲学思想研究)	Ph.D.	ニューヨーク・フォーダム大学、ワシントン・カトリック大学	著述5、論文4
アリス・ダナム(米)	史学	教授	西洋中世史	B.A. M.A.	セント・メリー・オルバニー大学、ボストン大学	論文4

1951年10月31日付「聖心女子大学大学院設置認可申請書」⁸⁾に拠ると、大学院の専任教員予定者は15名(国文学専攻：教授4、英文学専攻：教授5、史学専攻：教授6)であり、その中に日本人女性は見られない。国文学専攻は4名全員が男性(出身校：東京大学4)、史学専攻は5名男性(出身校：東京大学3、東北大学1、立教大学1)が占めている。英

文学専攻は5名全員が、史学専攻は1名が外国人女性であった（表2）。

2. 津田塾大学大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

津田塾専門学校（津田英学塾より1943年改称、外国語科・数学科・物理化学科）を前身とする津田塾大学（私立）は、1948年3月25日、新制大学として設置が認められ、1948年度に英文学部を開設し、1949年度に学芸学部（英文学科、数学科）に改めた。大学院（修士課程）は、1963年3月、2研究科（文学研究科、理学研究科）の設置が認可された。

津田塾大学では、粕谷よし学長（1952～1962年）の頃から大学院設置が懸念事項であったが、「当面は四年制大学の充実が先決問題」（1961年7月13日付理事長宛て「津田塾将来の根本方針に関する委員会」報告書）との答申を受けて設置申請を見送っていた⁹⁾。1962年11月30日付「津田塾大学大学院設置認可申請書」¹⁰⁾に拠れば、大学院文学研究科の専任教員予定者は5名（教授5）、そのうち男性は1名のみ、女性が4名を占めた（表3）。男性1名は、元東北帝国大学教授の土居光知（東京帝国大学1910年卒業、同大学大学院1910～13年在籍）である。

表3 津田塾大学大学院文学研究科の専任教員予定の女性一覧（1962年11月）

氏名	職名	担当科目	学位(取得年)	著書、論文数
			出身校等(卒業年、在学期間)	現職
近藤いね子	教授	英文学	文学士(1935)、M.L.(1939)、文学博士(1952／東京教育大学)	著書4、論文10
			女子英学塾(1932)、東北帝国大学法文学部(1935)、ケンブリッジ大学(1937-39)	津田塾大学教授
大山敏子	教授	英文学	文学士(1942)、M.A.(1951)	著書11、論文15
			津田英学塾(1935)、東京文理科大学文学科英語学英文学専攻(1942)・研究科(1942-44)、オハイオ州立大学大学院(1950-51)	津田塾大学教授
高野フミ	教授	英米文学	M.A.(1954)	論文7
			津田英学塾(1936)、ラドクリフ大学大学院(1953-54)	津田塾大学教授
一色マサ子	教授	英語学	M.A.(1953)	著書4、論文6
			女子英学塾(1930)、ミシガン大学大学院(1952-53)	津田塾大学教授

女性4名は前身校（女子英学塾・津田英学塾）の卒業生で、英米文学・英語学の研鑽のため海外留学を経て学位（M.A.やM.L.）をとり、母校の教授として奉職、後進を養成していた。近藤いね子は18世紀イギリスの女性小説家ジェーン・オースティン（Jane Austen）を、大山敏子は劇作家W.シェイクスピア（W. Shakespeare）を対象とした英文学者で、高野フミは19世紀小説家ヘンリー・ジェームス（Henry James）を対象とした米文学者、一色マサ子は英語の冠詞に関する言語学者である¹¹⁾。前者3名は英米文学にみる女性

像についても著しており、近藤いね子は「Jane Austen : the development of her art」で1952年に文学博士号も取得している¹²⁾。

3. 神戸女学院大学大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

神戸女学院専門学校（外国語科・家政科保健科・家政科育児科・経済科・音楽科）を前身とする神戸女学院大学（私立）は、1948年3月25日、新制大学として設置が認められ、1948年度に文学部（英文学科、家政学科、社会学科）を開設した。1952年4月には音楽学部を開設し、1967年4月には文学部家政学科を家政学部に変更した。

大学院（修士課程）は、1964年11月25日付で「神戸女学院大学大学院設置認可申請書」¹³⁾を文部省に提出し、1965年3月に大学院の設置が認可され、1965年度に文学研究科（英文学専攻、社会学専攻）が開設となった。大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者は、前掲の申請書に拠れば、教授8名（英文学専攻：教授5、社会学専攻：教授3）であり、その内女性は教授2名（英文学専攻）で外国人女性であった（表4）。

表4 神戸女学院大学大学院文学研究科（英文学専攻）の専任教員予定の女性一覧（1964年11月）

氏名(出身国)	職名	担当科目	学位(取得年)	著書、論文数
				出身校等(卒業年、在学期間)
B. F. デイヴィス(米) Bernice F. Davies	教授	文芸復興期英文学	B. A. (1924)、M. A. (1926)、Ph. D. (1943)	著書1、論文1
				タボール大学(1924)、アイオワ大学(1925-26)、スタンフォード大学大学院(1936-43)
G. R. ボードマン(米) Gwenn R. Boardman	教授	現代英小説	B. A. (1957)、M. A. (1961)、Ph. D. (1963)	著書3、論文3
				カリフォルニア大学(1957)、クレアモント大学院大学(1960-63)

4. 日本女子大学大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

日本女子大学校（英文学部、国文学部、師範家政学部第一類・第二類・第三類）を前身とする日本女子大学（私立）は、1948年3月25日、新制大学として設置が認められ、1948年度に文学部（国文学科、英文学科、史学科）と家政学部（児童学科、食物学科、生活芸術科、社会福祉学科、家政理学科）の2学部を開設した。大学院（修士課程）は1961年3月で設置が認可され、家政学研究科（児童学専攻、食物・栄養学専攻）を1961年度から開設した。大学院文学研究科（修士課程）の設置が認可されたのは1966年3月で、2専攻（英文学専攻、日本文学専攻）が1966年度に開設となった。

表5 日本女子大学大学院文学研究科の専任教員予定の女性一覧（1965年11月）

氏名	専攻	職名	担当演習等	学位(取得年)	著書、論文数
出身校等(卒業年、在学期間)					現職
大原恭子	英文学	教授	近代英文学	文学士(1927)	(記載なし)
	日本女子大学校(1920)、東京帝国大学聴講生(1922-23)、東北帝国大学法文学部(1927)、ミルズ女子大学聴講(1950-51内)				日本女子大学教授
三宅えつ	英文学	教授	英文学史	B. A. (1929)	(記載なし)
	神戸女学院大学部(1927)、マウント・ホリヨーク大学(1927-29)				日本女子大学教授
師岡愛子	英文学	助教授	米文学	文学士(1949)、文学修士(1960)	論文6
	日本女子大学校(1946)、立教大学文学部(1949)・同大学大学院(1960)、スミス女子大学(1955-56)、イギリス夏期大学(1956)				日本女子大学助教授
上村悦子	日本文学	教授	中古文学	文学博士(1964/名古屋大学)	著書7、論文16
	日本女子大学校(1933)				日本女子大学教授
青木生子	日本文学	教授	上代文学	文学士(1944)、文学博士(1962/東北大学)	著書7、論文24
	日本女子大学校(1941)、東北帝国大学法文学部(1944)				日本女子大学教授
井上百合子	日本文学	助教授	近代文学	文学士(1950)	著書8、論文18
	日本女子大学校(1947)、東京大学(1950)・同大学大学院(1950-55在籍)				日本女子大学助教授
国田百合子	日本文学	助教授	国語学	文学修士(1955)、文学博士(1965/国学院大学)	著書5、論文11
	日本女子大学校(1943)、東京帝国大学研究生(1944-46)、国学院大学大学院 MC(1953-55)・DC(1955-58)				日本女子大学助教授

大学院文学研究科(修士課程)の専任教員予定者は、1965年11月30日付設置認可申請書¹⁴⁾に拠れば、教授9名・助教授4名(英文学専攻:教授5・助教授2、日本文学専攻:教授4・助教授2)の13名であり、全員、文部省による合格判定を受けた。13名のうち女性性は7名と半数を占めた。その内訳は、教授4名・助教授3名(英文学専攻:教授2・助教授1、日本文学専攻:教授2・助教授2)である(表5)。

英文学専攻の3名(大原恭子、三宅えつ、師岡愛子)のうち、2名(大原、師岡)は日本女子大学校の卒業生である。大原恭子は日本女子大学校卒業後、聴講生に限り女性の受講を認め始めた東京帝国大学に1922~23年通い、1923年開学の東北帝国大学法文学部が学部学生として女性の入学を認めると1924年には同学部文科(英文学専攻)に進学し、西洋文学第一講座担当の土居光知教授とラルフ・ホジソン(Ralph Hodgson)に師事した¹⁵⁾。日本女子大学校卒業生から東北帝国大学法文学部に進学した最初の女性であり、1927年大学卒業後は直ちに母校に奉職、「学科長、文学部長、評議員、理事等を歴任し、大学の発展のため粉骨砕身した。とくに大学院創設の功は大である」¹⁶⁾と評されるほど、母校の英文学教育を牽引してきた女性であった。一方、師岡愛子は、19世紀アメリカの小説家ナサ

ニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) の作品 (『緋文字』など) を主としたアメリカ文学の研究者である。

日本文学専攻の4名 (上村悦子、青木生子、井上百合子、国田百合子) は、全員が日本女子大学校の卒業生である。日本女子大学校卒業後、学究の場を求めて、帝国大学 (東北帝国大学、東京帝国大学) に進学した者が2名 (青木、井上)、さらに旧制大学院へ進学した者が1名 (井上)、新制大学院に進学した者が1名 (国田) もいる。井上百合子は夏目漱石に関する多数の研究論文がある近代日本文学の研究者である。上村悦子は「蜻蛉日記：校本・書入・諸本の研究」で1964年12月名古屋大学から、青木生子は「日本古代文芸における恋愛：その本質と展開」で1962年3月東北大学から、国田百合子は「女房詞の研究」で1965年10月国学院大学から文学博士号を授与されており、上古・中古文学を中心とする日本古典文学の研究者が揃っている。

5. 実践女子大学大学院文学研究科 (修士課程) の専任教員予定者について

実践女子専門学校 (文科、家政科) を前身とする実践女子大学 (私立) は、1949年2月、新制大学として設置が認められ、1949年度に文家政学部 (国文学科、英文学科、家政学科) を開設した。1965年1月には、文学部 (国文学科、英文学科) と家政学部 (食物学科、被服学科) の2学部制となった。

大学院 (修士課程) については、「実践女子大学大学院設置認可申請書」¹⁷⁾ を1965年11月29日付で文部省に提出、翌年2月家政学研究科の1専攻 (被服学専攻) の申請を取り下げ、1966年3月に大学院の設置が認可された。1966年度に開設となったのは、文学研究科 (国文学、英文学専攻)、家政学研究科 (食物・栄養学専攻) である。大学院文学研究科 (修士課程) の専任教員予定者は、前掲の申請書に拠れば、教授9名・助教授1名 (国文専攻：教授5、英文学専攻：教授4・助教授1) であった。そのうち女性は助教授1名 (英文学専攻)、山脇百合子である (表6)。山脇百合子は新制女子大学や短期大学 (東京女子大学文学部講師：1954～63年、女子美術大学講師：1959～62年、実践女子学園短期大学講師：1958年～) において英語・英文学の教鞭をとり、実践女子大学では1962年に助教授に着任すると「女流作家論」・「作品鑑賞」を担当した。研究論文は、特に、19世紀イギリスの女性小説家シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) に関するものが多い。

表6 実践女子大学大学院文学研究科の専任教員予定の女性一覧 (1965年11月)

氏名	専攻	職名	担当科目	学位 (取得年)	著書、論文数
		出身校等 (卒業年、在学期間)			現職
山脇百合子	英文学	助教授	英文学特別研究	文学士 (1943)	論文7
		東京女子大学 (1940)、早稲田大学文学部 (1943)・同大学大学院 (1943-45)、リヴァプール大学大学院 (1953-54)			実践女子大学助教授

6. 京都女子大学大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

京都女子高等専門学校を前身とする京都女子大学（私立）は、1949年3月、新制大学として設置が認められ、1949年度に文学部（国文学科、英文学科、中国文史学科）、家政学部（食物学科、被服学科、児童学科）を開設した。

大学院（修士課程）については、「京都女子大学大学院（修士課程）設置認可申請書」¹⁸⁾を1965年11月30日付で文部省に提出、翌年3月18日に計画の一部（文学研究科の英文学専攻、家政学研究科の食物学専攻・被服学専攻）を取り下げ、大学院の設置が認可された。1966年度に開設となったのは、文学研究科（国文学、東洋史学専攻）と家政学研究科（児童学専攻）の2研究科である。

大学院文学研究科(修士課程)の専任教員予定者は、前掲の申請書に拠れば、教授8名・助教授2名（国文学専攻・東洋史学専攻：教授各4、助教授各1）で全員が男性である。教授予定者は、古代文学、国語音韻学、東洋古代中世史、東洋アジア史、日本古代中世史、民俗学の主要な科目の担当として計画されている。教授予定者8名の出身校は、東京帝国大学1名、京都帝国大学3名、京都大学3名、龍谷大学1名であり、旧帝国大学系か京都女子大学と同じ西本願寺系の大学出身者が占めている。

7. 共立女子大学大学院文芸学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

共立女子専門学校（育児科・生活科・被服科）を前身とする共立女子大学（私立）は、1949年3月、新制大学として設置が認められ、1949年度に家政学部(被服学科、生活学科)を開設した。1953年度には文芸学部（文学専攻、芸術学専攻）を増設した。

大学院（修士課程）は、2研究科（家政学研究科、文芸学研究科）を計画した「共立女子大学大学院設置認可申請書」¹⁹⁾を1965年11月30日付で文部省に提出した。翌年2月に家政学研究科、3月に文芸学研究科（日本文学専攻）を取り下げた後、大学院の設置が認可された。1966年度に開設となったのは、文芸学研究科（演劇学専攻、英文学専攻）である。

大学院文芸学研究科（修士課程）の専任教員予定者は、前掲の申請書に拠れば、教授9名・助教授1名・講師1名（演劇学専攻：教授6、英文学専攻：教授3・助教授1・講師1）であり、その内女性は助教授1名（英文学専攻）のみであった（表7）。

表7 共立女子大学大学院文芸学研究科（英文学専攻）の専任教員予定の女性一覧（1965年11月）

氏名	専攻	職名	担当科目	学位(取得年)	著書、論文数
	出身校等(卒業年、在学期間)				現職
外山弥生	英文学	助教授	イギリス文学特殊問題、 英文学文献研究	文学士(1948)	著書7、論文12
	東京文理科大学文学科英語学英文学専攻(1948)・ 研究科(1948-50、51-54)				共立女子大学助教授

女性で唯一、専任教員予定者となった外山弥生は、共立女子大学で1954年4月から英米文学科目の教鞭をとり、19世紀イギリスの詩人ロバート・ブラウニング (Robert Browning) や19-20世紀イギリスの詩人ジョン・メンスフィールド (John E. Masefield) を対象とした英文学研究を行っていた。文部省による判定は合格で、1966年度からは大学院専任となった。

8. 同志社女子大学大学院文学研究科 (修士課程) の専任教員予定者について

同志社女子専門学校 (外国語科英語科、家政科育児科、家政科生活科) を前身とする同志社女子大学 (私立) は、1949年3月、新制大学として設置が認められ、1949年度に学芸学部 (英文学専攻・音楽専攻・食物学専攻) を開設した。1965年には3専攻を英文学科・音楽学科・家政学科に改めた。

大学院 (修士課程) については、1966年11月29日付で「同志社女子大学大学院設置認可申請書」²⁰⁾を文部省に提出し、翌年3月に大学院の設置が認可され、1967年度に文学研究科 (英文学専攻) が開設となった。文学研究科 (修士課程) の専任教員予定者は、前掲の申請書に拠れば教授7名であり、そのうち女性は5名であった (表8)。

E. L. ヒバードは宣教師で、同大学の初代学長 (1949～1950年) も務めたアメリカ人である²¹⁾。同大学教授として、学芸学部英文学科では「英文学形態」・「作家研究」・「作品研究」の授業を担当していた。高田峯尾は学芸学部英文学科で「シェイクスピア研究」・「作家研究」・「劇総論」の授業を担当していた教授で、京都女子大学では「英文学史」授業の兼任講師をつとめていた。瀧山季乃は学芸学部英文学科で「作家研究」・「作品研究」・「英米文学概論」の授業を担当していた教授で、19世紀イギリスの小説家トーマス・ハーディ (Thomas Hardy) に関する研究論文を多く著している。望月満子は学芸学部英文学科で「英文学史」・「作家研究」・「作品研究」の授業を担当していた教授で、瀧山と同じく Thomas Hardy やサマセット・モーム (W. Somerset Maugham) など、19-20世紀イギリスの小説家を主な対象として多くの研究論文を著している。

表8 同志社女子大学大学院文学研究科 (英文学専攻) の専任教員予定の女性一覧 (1966年11月)

氏名 (出身国)	職名	担当科目	学位 (取得年)	著書、論文数
	出身校等 (卒業年、在学期間)			現職
E. L. ヒバード (米) Esther L. Hibbard	教授	英文学とキリスト教	B. A. (1924)、M. A. (1926)、 Ph. D. (1944)	著書2、論文5
	マウント・ホリヨーク大学 (1924)、ウィスコンシン大学 (1926)、ミシガン大学 (1944)			同志社女子大学教授、 宣教師
高田峯尾	教授	英文学特講	B. A. (1926)、M. A. (1930)	論文17
	日本女子大学校 (1923)、ウェルス大学 (1926)、オックスフォード大学 (1930)			同志社女子大学教授

瀧山季乃	教授	英文学特講	文学士(1934)	著書1、論文26
	同志社女子専門学校英文科(1930)、同志社大学文学部英文学科(1934)、クレアモント大学院大学(1952-53)			同志社女子大学教授
望月満子	教授	英文学特講	文学士(1941)	著書1、論文19
	同志社女子専門学校英文科(1938)、同志社大学文学部英文学科(1941)、シカゴ大学(1951-52)			同志社女子大学教授
吉川順	教授	英語修辞学	B. A. (1926)	論文2
	カリフォルニア大学(1926)・同大学大学院(1926-27)			同志社女子大学教授

9. 金城学院大学大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

金城女子専門学校（国語科、英文科、育児科、生活科、被服科、経済科）を前身とする金城学院大学（私立）は、1949年3月、新制大学として設置が認められ、1949年度に英文学部（英文科）を開設した。1954年度には英文学部を文学部と改め、国文学科を増設した。

大学院（修士課程）については、1966年11月29日付で大学院設置認可申請書²²⁾を文部省に提出し、翌年3月に大学院の設置が認可され、1967年度に文学研究科（英文学専攻）を開設した。大学院設置認可申請書で計画していた文学研究科（国文学専攻）は、1967年度では教員構成が「不成立」判定となり、翌年度の開設となった。

1966年11月29日付申請書上での大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者は、教授9名（国文学専攻4、英文学専攻5）、助教授1名（国文学専攻）であった。そのうち、女性 は 2 名（英文学専攻・教授）、外国人女性が占めた（表9）。

表9 金城学院大学大学院文学研究科（英文学専攻）の専任教員予定の女性一覧（1966年11月）

氏名(出身国)	職名	担当科目	学位(取得年)	著書、論文数
	出身校等(卒業年等)			現職
マーガレット・モートン・アーチボルト(米)	教授	英文学	B. A. (1924)	論文3
	サウス・ウエスタン大学(1923)、ハーバード大学(1924)、ジョージ・ピーボディ大学(1935)			金城学院大学教授
メリー・キャザリン・フルツ(米)	教授	英文学	B. A. (1936)、M. A. (1942)、M. R. E. (1955)	論文2
	ブリッジ・ウォーター大学(1936)、デューク大学大学院(1942)、ニューヨーク州聖書神学校(1955)、リッチモンド市立大学大学院(1960)			金城学院大学教授

10. 東京女子大学大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

東京女子大学（1918年開学、旧制の女子専門学校）を前身とする東京女子大学（私立）は、1948年3月25日、新制大学として設置が認められ、1948年度に文学部（哲学科、国文学科、英文学科）を開設した。1961年には、文理学部（哲学科、日本文学科、英米文学科、史学科、社会学科、心理学科、数理学科）となり、社会科学・自然科学系の学科が加わった。大学院（修士課程）は1971年3月で設置が認可され、文学研究科（日本文学専攻、英米文学専攻）、理学研究科（数学専攻）が1971年度に開設となった。大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者は、1970年11月30日付「東京女子大学大学院設置認可申請書」²³⁾に拠れば、教授11名・助教授5名（日本文学専攻：教授5・助教授2、英米文学専攻：教授6・助教授3）であり、その内女性は教授5名・助教授3名（日本文学専攻：教授2、英米文学専攻：教授3・助教授3）と大部を占めている（表10）。

日本文学専攻の2名（丸山キヨ子、松村緑）は、東京女子大学の1930年代の卒業生で、両者とも東北帝国大学法文学部と同大学大学院に進学した。丸山キヨ子は「源氏物語」を『白氏文集』をはじめとする漢籍や仏教・仏典との関わりで分析した日本古典文学研究者であり、後に「源氏物語の仏教：その宗教性の考察と源泉となる教説の探求」としてまとめ、1984年9月に東北大学から文学博士号を授与された。松村緑は薄田泣菫・石上露子・蒲原有明などの近代日本詩人に関する評伝を著した研究者であり、著書『薄田泣菫』（角川書店、1957年）において第6回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した²⁴⁾。

表10 東京女子大学大学院文学研究科の専任教員予定の女性一覧（1970年11月）

氏名	専攻	職名	担当科目	学位(取得年)	著書、論文数
	出身校等(卒業年、在学期間)				現職
丸山キヨ子	日本文学	教授	日本文学演習	文学士(1947)	著書2、論文22
	東京女子大学大学部国文学科(1939)、東北帝国大学法文学部文科(1947)・同大学大学院(1947-48)				東京女子大学教授
松村緑	日本文学	教授	日本文学演習	文学士(1936)	著書4、論文17
	東京女子大学国語専攻部(1932)、東北帝国大学法文学部文科(1936)・同大学大学院(1936-38)				東京女子大学教授
永井晃子	英米文学	教授	英文学特殊研究	文学修士(1956)	論文5
	東京女子大学英語専攻部(1936)、ピュージェット・サウンド大学(1950-51)、カリフォルニア大学(1951-52)、明治学院大学大学院MC(1956-58)・DC(1963-66)				東京女子大学教授
江口裕子	英米文学	教授	米文学演習	文学士(1949)	著書1、論文20
	東京女子大学英語専攻部(1941)、東京大学(1949)、ラドクリフ大学大学院(1954-56)、ハーバード大学・ソルボンヌ大学DC(1969-70)				東京女子大学教授

高橋道	英米文学	教授	米文学演習	文学士(1950)、M.A. (1962)	論文12
	東京女子大学英語専攻部(1947)、東京大学(1950)、ペンシルヴァニア大学 MC(1960-62)				東京女子大学教授
橋爪茂子	英米文学	助教授	英文学演習	文学士(1954)、文学修士(1956)	論文6
	東京女子大学文学部(1954)、東京大学大学院 MC(1954-56)、コロンビア大学大学院(1962-63)				東京女子大学助教授
佐藤宏子	英米文学	助教授	米文学演習	文学士(1956)、文学修士(1958)、M.A. (1960)	著書2、論文11
	東京女子大学文学部(1956)、東京大学大学院 MC(1956-58)、マウント・ホリヨーク大学 MC(1958-60)				東京女子大学助教授
西野和子	英米文学	助教授	英語学演習	文学修士(1959)	翻訳2、論文7
	東京女子大学(1949)、ミシガン大学(1953)、ロンドン大学(1954)、早稲田大学大学院 MC(1957-59)				東京女子大学助教授

英米文学専攻の6名（永井晃子、江口裕子、高橋道、橋爪茂子、佐藤宏子、西野和子）は、東京女子大学の1930～1950年代の卒業生である。4名（永井、江口、高橋、西野）は旧制の女子専門学校時期の2名（橋爪、佐藤）が新制大学時期の卒業生である。東京女子大学を卒業後の6名は、海外の大学で英米文学や英語学を研鑽している。永井晃子は20世紀イギリスの詩人T.S.エリオット（T. S. Eliot）を、江口裕子は19世紀アメリカの小説家・詩人エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）を、橋爪茂子は18-19世紀イギリスの詩人W. ワーズワース（William Wordsworth）を、佐藤宏子は19-20世紀アメリカの女性小説家イーディス・ウォートン（Edith Wharton）を対象とした論文を著している。

11. お茶の水女子大学大学院人文科学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

お茶の水女子大学（国立）は、1949年5月31日国立学校設置法の公布・施行により、東京女子高等師範学校（文科、理科、家政科、体育科）を包括して新制大学として設置され、文学部、理家政学部を開設した。1950年4月には、文教育学部（文学科、哲学科、史学科、地理学科、教育学科）、理学部（数学科、物理学科、化学科、生物学科）、家政学部（児童学科、食物学科、被服学科）の3学部体制となった²⁵⁾。

大学院（修士課程）の設置は1963年4月文部省に認可され、1963年度に家政学研究科（3専攻）を、翌年度に理学研究科（4専攻）を、1966年度に人文科学研究科（7専攻）を順次、開設した。1966年1月22日付で文部省に提出した「お茶の水女子大学大学院人文科学研究科設置計画書」²⁶⁾に拠れば、人文科学研究科（7専攻）の専任教員予定者は47名（教授26名、助教授14名、講師7名）であった（表11）。そのうち、女性は4名（教授2名、助教授1名、講師1名）、専攻はすべて異なり、哲学・日本文学・中国文学・英文学の4

分野にわたる (表12)。

哲学専攻の石塚富士子は、文教育学部で近世哲学史を担当しており、カント哲学における「判断力」に関する論文を著していた哲学者である。日本文学専攻の関根慶子は、文教育学部で中古文学を担当する教授で、紫式部日記、更科日記、蜻蛉日記、寝覚物語、源氏物語に関する多数の研究論文を発表していた国文学者である。中国文学専攻の中山時子は、文教育学部で中国語教授法・中国文学講読等を担当しており、中国語会話のテキストや翻訳書を著している。英文学専攻の伊吹知勢は、文教育学部で英文学史、英文学演習、一般英語を担当し、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) や Jane Austen といったイギリスの女性小説家について著述がある。文部省による判定は4名全員合格で、1966年度からは大学院専任となった。

表11 人文科学研究科7専攻の専任教員予定数 (1966年1月)

職名／専攻	哲学	史学	地理学	日本文学	中国文学	英文学	教育学	計
教授	3	4	2	4(1)	2	4(1)	7	26(2)
助教授	2(1)	2	3	2		2	3	14(1)
講師	1	1			2(1)	1	2	7(1)
計	6(1)	7	5	6(1)	4(1)	7(1)	12	47(4)

[注] () は女性数で内数。

表12 お茶の水女子大学大学院人文科学研究科の専任教員予定の女性一覧 (1966年1月)

氏名	専攻	職名	担当科目	学位(取得年)	著書、論文数
	出身校等(卒業年、在学期間)				現職
石塚富士子	哲学	助教授	哲学演習	文学士(1941)	論文4
	東京文理科大学哲学科哲学専攻(1941)・研究科(1941-43)				お茶の水女子大学助教授
関根慶子	日本文学	教授	古文学特論(中古文学、上古文学)	文学士(1939)、文学博士(1962/東京教育大学)	著書6、論文22
	東京女子高等師範学校文科(1931)、東京理科大学文学科国語国文学専攻(1939)				お茶の水女子大学教授
中山時子	中国文学	講師	中国語学特論、中国語学演習	文学士(1949)	著書3
	東京大学文学部中国文学科(1949)・同大学大学院(1949-50)				お茶の水女子大学講師
伊吹知勢	英文学	教授	英文学特論、英文学演習	文学士(1943)	著書3、論文6
	東京女子大学英語専攻部(1928)、東京文理科大学文学科英語学英文学専攻(1943)				お茶の水女子大学教授

[注] 『東京文理科大学一覧』、『低き心 高き志 関根慶子博士の生涯』(風間書房、1999年) より補足した。

12. 奈良女子大学大学院文学研究科（修士課程）の専任教員予定者について

奈良女子大学（国立）は、1949年5月31日国立学校設置法の公布・施行により、奈良女子高等師範学校（理科、文科、家政科、体育科）を包括して新制大学として設置され、文学部（社会学科、国語国文学科、英語英文学科、史学及地理学科）、理家政学部（数学科、物理学科、化学科、生物学科、家政学科）を開設した。1953年には理家政学部を理学部と家政学部に分離した。

大学院（修士課程）の設置は1964年3月文部省に認可され、1964年度に家政学研究科、翌年度に理学研究科、1968年度に文学研究科を開設した。文学研究科については、1968年1月12日付で文部省に提出した「奈良女子大学大学院文学研究科（修士課程）設置計画書」²⁷⁾で5専攻（国文学、英文学、地理学、教育学、史学）を盛り込んでいたが、教員構成の判定が成立せず、史学専攻は1年遅れて1969年度の開設となった。

1968年度開設となった4専攻の専任教員予定者は、1968年1月12日付申請書では、教授12名（国文学3、英文学2、地理学4、教育学3）、助教授7名（国文学2、英文学4、教育学1）、講師4名（英文学1、地理学1、教育学2）であった。その内、女性が確認できたのは2名、樽松静江（地理学専攻・教授）と安藤照子（教育学専攻・講師）である（表13）。一方、史学専攻の専任教員予定者（教授4名、助教授3名）は、1968年1月12日付申請書及び1969年1月16日付申請書²⁸⁾では全て男性であり、女性は見当たらない。

樽松静江は1953年から奈良女子大学に勤め、奈良盆地における農村共同体の地理学的研究を行い、日本地理学会編『地理学評論』に多数の論文を発表、『人文地理学研究法』（朝倉書店、1957年）では「社会地理学研究史」も著わしていた地理学者である。安藤照子は1955年4月から奈良女子大学に勤め、児童心理学に関する研究論文や発達心理学に関する概論を著していた心理学者である。両者共に合格判定を受け、1968年度からは文学研究科専任となった。

表13 奈良女子大学大学院文学研究科の専任教員予定の女性一覧（1968年1月）

氏名	専攻	職名	担当科目	学位(取得年)	著書、論文数
	出身校等(卒業年、在学期間)			現職	
樽松静江	地理学	教授	人文地理学特論、人文地理学 野外調査法、特別研究		著書3、論文25
	奈良女子高等師範学校文科(1937)			奈良女子大学教授	
安藤照子	教育学	講師	教育心理学特論、教育心理学 演習	文学士(1952)	著書4、論文12
	京都大学文学部哲学科心理学専攻(1952)・同大学大学院特別研究生(1952-55)			奈良女子大学講師	

むすび

1951～1970年度に設置認可された女子大学大学院文系研究科（修士課程）の12校（表1）において、新設された専攻は、英文学に関する専攻が11校（英文学専攻10校、英米文学専攻1校）で最多であった。次いで、日本文学に関する専攻（国文学専攻5校、日本文学専攻3校）が8校、歴史学に関する専攻（史学専攻3校、東洋史学専攻1校）が4校、地理学に関する専攻（地理学専攻）が2校と続き、中国文学専攻・哲学専攻・演劇学専攻・教育学専攻・社会学専攻が各1校に設置された。

文学、特に英文学と日本文学は、新制女子大学の前身校である、旧制の女子専門学校・女子高等師範学校が文系課程として配置した代表的・伝統的な分野で、教育・研究の歴史と実績がある。社会科学系（教育学、社会学）の専攻は、他の女子大学では大学院家政学系研究科内の専攻として設置されることもあった。設置が認可された専攻は、いずれも、新制女子大学設置の際に学部内の学科・専攻として前身校（旧制の女子専門学校・女子高等師範学校）から引き継がれた学術分野である。

表1に掲げた女子大学大学院文系研究科（修士課程）12校の専任教員予定者において、女性が見られなかった大学は1校（京都女子大学）、それ以外の11校には専任教員予定者に女性があり、その総数は42名である。専任教員予定者に至るまでの女性の進学経歴（留学、大学院、学位）を、専攻分野別にあらわすと表14、表15のとおりとなる。

英文学・英米文学専攻（表14）では、専任教員予定者の女性は30名、母国の大学で学位を取得した外国人女性（10名）か、海外大学に留学経験のある日本人女性（18名）が占めており、外国語・外国文学を扱う専攻分野としての特徴といえる。外国人女性はキリスト教の布教・教育活動を目的に来日した女性たちで、キリスト教系の女子大学4校のみに見られる。そのうちの3校（聖心女子大学、神戸女学院大学、金城学院大学）は、専任教員予定者の女性全員が外国人であった。その一方で、英文学・英米文学以外の専攻（表15）では、専任教員予定者の女性は12名、外国人女性は1名（聖心女子大学、史学専攻）のみで、11名は日本人女性が占めた。日本人女性11名は、国内の高等教育機関で学業歴・研究歴をつんでいる。

英文学専攻・英米文学専攻・日本文学専攻・哲学専攻・中国文学専攻の5専攻分野では、国内の旧制大学に進学して文学士号を取得した女性が見られる。旧制大学（帝国大学令に基づく帝国大学、大学令に基づく官立・私立大学）は、男子の高等普通教育機関（高等学校・大学予科）からの進学を前提としており、制度的に女性の入学を想定していなかった。そのようななか、文系分野では、東北帝国大学法文学部（1922年新設）、九州帝国大学法文学部（1924年新設）、東京・広島文理科大学（1929年新設）、私立大学の一部の学部（同志社大学文学部・法学部、明治大学法学部、早稲田大学文学部等）において、女性たちを学生として受け入れた。東北帝国大学法文学部で5名（英文学専攻：近藤いね子・大原恭子、日本文学専攻：松村緑・丸山キヨ子・青木生子）、東京文理科大学で5名（英文

学専攻：大山敏子・外山弥生・伊吹知勢、哲学専攻：石塚富士子、日本文学専攻：関根慶子）、早稲田大学文学部で1名（英文学専攻：山脇百合子）、同志社大学文学部で2名（英文学専攻：瀧山季乃・望月満子）、計13名の女性たちが文学士号を取得し、研究者の道に踏み出している。

表14 大学院文系研究科英文学・英米文学専攻における専任教員予定者の女性の進学経歴

大学名	開設年度	教員予定者数	海外)大学出身者・留学経験者数	国内)研究科・大学院経験者数	学位（取得者数）
聖心女子大学	1952	5(5)	5(5)		Ph. D. (1)、M. A. (3)、B. A. (1)
金城学院大学	1967	2(2)	2(2)		M. A. (1)、B. A. (1)
神戸女学院大学	1965	2(2)	2(2)		Ph. D. (2)
同志社女子大学	1967	5(1)	5(1)		Ph. D. (1)、M. A. (1)、文学士(2)、B. A. (1)
東京女子大学	1971	6	6	4	文学修士(4)、M. A. (1)、文学士(1)
津田塾大学	1963	4	4	1	文学博士(1)、M. A. (3)
日本女子大学	1966	3	3	1	文学修士(1)、文学士(1)、B. A. (1)
実践女子大学	1966	1	1	1	文学士(1)
共立女子大学	1966	1		1	文学士(1)
お茶の水女子大学	1966	1			文学士(1)

[注] 1) 学位欄は各自の最上位の取得学位を表し、国内外で取得した学位は日本での学位を選択した。表15も同様。

2) 教員予定者数、海外)大学出身者・留学経験者数の()は内数で外国人数を表す。表15も同様。

3) 研究科は東京文科大学研究科を示す。表15も同様。

表15 大学院文系研究科の英文学・英米文学専攻以外における専任教員予定者の女性の進学経歴

専攻	大学名	教員予定者数	海外)大学出身者・留学経験者数	国内)研究科・大学院経験者数	学位（取得者数）
日本文学	日本女子大学	4		2	文学博士(3)、文学士(1)
	東京女子大学	2		2	文学士(2)
	お茶の水女子大学	1			文学博士(1)
中国文学	お茶の水女子大学	1		1	文学士(1)
史学	聖心女子大学	1(1)	1(1)		M. A. (1)
哲学	お茶の水女子大学	1		1	文学士(1)
地理学	奈良女子大学	1			
教育学	奈良女子大学	1		1	文学士(1)

1945年12月閣議決定された「女子教育刷新要綱」にもとづき1946年度入試から旧制大学でも男女の教育機会が均等となった後は、東京帝国大学に4名（日本文学専攻：井上百合子、英米文学専攻：江口裕子・高橋道、中国文学専攻：中山時子）、立教大学に1名（英文学専攻：師岡愛子）が進学し、文学士号を取得した。さらに、東北帝国大学大学院に2名（松村緑・丸山キヨ子）、東京文理科大学研究科に3名（大山敏子・外山弥生・石塚富士子）、早稲田大学大学院に1名（山脇百合子）、東京大学大学院に2名（井上百合子・中山時子）、計8名が、学部卒業後に研究の場を大学院や研究科に求めて進学している。

「大学院設置審査基準要項」（大学設置審議会、1952年10月11日決定）は、「大学院の教員資格」は、①「博士の学位を有する者」、②「研究業績のある者」のいずれかに該当する者と定めた。①には「単に学位を有するだけで充分であるというのではなく、研究の指導並びに教育上の能力及び識見をもっていることが必要」と釘を刺し、②には、①に「匹敵する能力並びに識見のある者」で、「公刊された著書、論文、報告等」による「研究業績」を示すよう要求した²⁹⁾。京都女子大学では、1965年11月に大学院文学研究科（3専攻）・家政学研究科（3専攻）の設置認可を申請した際、専任教員予定者は男性ばかりであったが、「審査内規によれば各専攻には四本の柱となる研究分野が要求され、その内三本の柱には必ず④教授を必要とするということ位のことしか情報としては得られず」、専任教員予定者を揃えることに大変苦心し、専攻分野の歴史の浅さや施設・設備等の問題もあり、各研究科で各2専攻を取り下げざるを得なかったという³⁰⁾。戦前期の男女不均等な教育制度のもと、学問への揺るぎない意欲と研究心によって、国内外で進学・研究の道をつかみ取り、学問の世界で実力を示し続けた女性たちが、新制女子大学大学院の文系研究科（修士課程）の新設にあたって、上記の「大学院設置審査基準要項」を突破できる存在となり、大きな役割を果たしていたといえる。

【注】

- 1) 文部省編『学制百年史』記述編、帝国地方行政学会、1972年、744頁。
- 2) 東京女子大学100年史編纂委員会編『東京女子大学100年史』本編、東京女子大学、2019年、262～263頁。
- 3) 国立大学協会50周年記念行事準備委員会編『国立大学協会五十年史』国立大学協会、2000年、35頁。
- 4) 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編・発行『お茶の水女子大学百年史』1984年、448頁。
- 5) 武庫川女子大学（1971年）、大妻女子大学（1972年）、甲南女子大学（1975年）、梅光女学院大学（1976年）、梅花女子大学（1977年）など、東京女子大学以外で1970年代に大学院文学研究科を新設した新制女子大学については、「大学院設置認可申請書」等の文部省移管文書が所蔵先（国立公文書館）で利用審査中のため未見のことが多い。そのため、本稿では対象とはせず、今後の検討課題とする。
- 6) 拙稿「1918～1945年における帝国大学大学院への女性の進学状況（一）——化学専攻の進学者に着目して」（『北海道大学大学文書館年報』第13号、2018年3月、48～61頁）、「1918～1945年における帝国大学大学院への女性の進学状況（二）——法学専攻の進学者に着目して」（『北海道大学大学文書館年報』第14号、2019年3月、98～113頁）。
- 7) 文部省移管簿書「聖心女子大学 第23の1冊 自昭和23年4月至昭和26年2月」（国立公文書館所

- 蔵）所収。以下、文部省移管簿書は国立公文書館所蔵の判定原本を使用、所蔵先を略すこととする。
- 8) 文部省移管簿書「聖心女子大学 第23の2冊 自昭和27年5月至昭和31年2月」所収。
 - 9) 津田塾大学100年史編纂委員会編『津田塾大学100年史』津田塾大学、2003年、261・264頁。
 - 10) 文部省移管簿書「津田塾大学 第12冊 自昭和23年4月至昭和38年3月」所収。
 - 11) 「大学院設置認可申請」中の研究業績目録のほか、国立国会図書館書誌情報を参照した。以下、同様の方法で専任予定教員の女性の研究業績を確認した。
 - 12) 『日本博士録』教育行政研究所・1956年・778頁、国立国会図書館所蔵博士論文書誌情報を参照。
 - 13) 文部省移管簿書「神戸学院大学 第1の2冊 自昭和29年7月至昭和40年3月」所収。
 - 14) 文部省移管簿書「日本女子大学 第25の5冊 昭和41年3月」所収。
 - 15) 大原恭子「あの頃のこと」、『英文学試論 土居光知先生喜寿記念論文集』研究社、1964年、297～300頁。
 - 16) 日本女子大学編・発行『日本女子大学学園事典 創立100年の軌跡』2001年、87頁。
 - 17) 文部省移管簿書「実践女子大学 第32の3冊 自昭和40年3月」所収。
 - 18) 文部省移管簿書「京都女子大学 第8の4冊 昭和41年3月」所収。簿書には「当初」版と、「改訂」版が綴られている。本稿では「改訂」版を使用した。
 - 19) 文部省移管簿書「共立女子大学 第27の3冊 昭和41年3月」所収。
 - 20) 文部省移管簿書「同志社女子大学 第10の4冊 昭和42年1月」所収。
 - 21) 『同志社女子大学125年』2000年、150頁。
 - 22) 文部省移管簿書「金城学院大学 第1の5冊 自昭和41年5月至昭和42年6月」所収。
 - 23) 文部省移管簿書「東京女子大学 第24の4冊 昭和46年3月」所収。
 - 24) 松村緑については、大嶋知子『松村緑の人と学問—日本近代詩研究の一足跡—』（教育出版センター、1995年）が詳しい。大嶋は松村緑の門下生である。
 - 25) 前掲『お茶の水女子大学百年史』856、858～859頁。
 - 26) 文部省移管簿書「お茶の水女子大学 第3冊 自昭和39年3月至昭和41年4月」、「お茶の水女子大学 第4冊 昭和41年4月」所収。
 - 27) 文部省移管簿書「奈良女子大学 第3冊 自昭和40年4月至昭和43年3月」所収。
 - 28) 文部省移管簿書「奈良女子大学 第5冊 自昭和43年3月至昭和43年10月」所収。
 - 29) 文部省大学学術局大学課編『昭和三十六年度大学関係法令集』1962年3月、79頁。
 - 30) 京都女子学園学園史編纂委員会編『京都女子学園八十年史』京都女子学園、1990年、279～289頁。

〔後記〕 本稿は、JSPS 科研費 JP17K04516の助成を受けたものである。

（やまもと みほこ／北海道大学大学文書館員）